

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
はやし 林 かねこ 兼子	女 性	1 2 歳	新 城 市 玖 老 勢

「兵隊さんの慰安会で独唱することに」

○ 鳳来小学校から鳳来国民学校に

私が通った鳳来小学校は、玖老勢の現在の鳳来こども園の所がありました。当時は子ども数も多くて、高等科を合わせると全校で300人以上いたと思います。昭和16年に国民学校令が制定され、鳳来小学校は鳳来国民学校となりました。



旧鳳来国民学校跡地 現鳳来こども園

昭和17年（1942）頃になると、当時の鳳来小学校の校舎の一部は傷病兵の陸軍病院になっていました。私が3年生の時でした。ある日、炭焼き部隊と呼んだ兵隊さんたちが30人から50人くらい鳳来小学校へやってきました。兵隊さんばかりで私は怖くなりましたが、実態は作業部隊で炭焼きだけでなく堰堤や用水路も整備されたようです。兵隊さんたちは、今もある忠魂塔の下に調理場を作って煮炊きをし、小学校の4教室分ぐらいを使って寝泊まりしました。

ある日、鈴木素子先生から話がありました。「今晚兵隊さんの慰安会が行われるそうよ。兵隊さんがいろいろ演芸をしてくれるそうだけど、竹生校長先生から小学生も何かやってほしいと言われたの。兼ちゃん、歌を歌ってくれる。」と言われたのです。いきなり今晚歌うって、もうびっくりです。でも断れなくて、すぐ練習に入りました。先生が教室のオルガンで伴奏され、何度も繰り返し、意味が分からないまま歌詞を覚え歌いました。教室に大きな鏡があり、その鏡で大きな口を開けれるようにするんだよと言われました。それは授業で習うことはなかった初めて聞く歌でしたが、必死に覚えたので今も歌うことができます。

会場は学校に広い講堂はなかったので、教室の板戸の仕切りを外して広くし、教壇を積んで高くした特設ステージでした。慰安会では兵隊さんたちが大勢いました。緊張しながら一生懸命歌いま



旧鳳来寺村忠魂塔 陸軍大将の揮毫

した。うまく歌えたのか分かりませんが、みなさんが拍手してくれたのでとてもうれしかったです。

その時は意味も分からないまま歌いましたが、歌詞はとても悲しくて、元気に出征していった兵隊さんが白木の箱に入って帰ってくる、それを子供たちが迎え、哀悼の意を表するという歌です。戦時中は勇ましい歌が多かったのですが、この歌はとても悲しい歌でした。この歌でよかったのか分かりませんが、素子先生は二番の気持ちを兵隊さんに伝えたかったのかと思います。

無言のがいせん

- 1 雲山（うんざん）万里を駆け回り
敵を破ったおじさんが
今日は無言で帰られた
- 2 御国（みくに）の使命にぼくたちも
やがて働く日が来たら
おじさん あなたが手本です
- 3 無言の勇士のがいせんに
梅のかおりが身にしみる
みんなは無言でおじぎした

この曲は昭和17年発行の国民学校初等科音楽の教科書にある掲載されていた文部省唱歌です。

○ 空襲警報のこと

昭和19年になると、警報で避難するようになりました。学校には二つ防空壕がありましたが、みんなが入れるはずもありません。今の玖老勢公民館の少し南に旧鳳来寺村役場があり、そこに火の見櫓がありました。係の人がいて、空襲の時は「カン、カン、カン、カン」と半鐘を打ち鳴らします。その後、火の見櫓に吹き流しを取り付けて知らせるようになっていました。赤と白は空襲警報、赤と青は警戒警報だったと思います。空襲警報が出ると学校では、すぐに外へ出て整列し点呼、今の忠魂塔の裏の竹藪に全員避難しました。

ある日、棚山の方から日差しを浴びてキンキンに光る飛行機がブーンと飛んできました。大きな飛行機で、「日本の飛行機だ、がんばって〜」と叫びました。とその後ろにカラスのような小さな飛行機がついていきました。アメリカの飛行機はなんて小さいのかと思ったのですが、後で聞くとそれは逆だったのです。大きな飛行機がB29だったのです、B29を見たのはそれ一度きりでした。カラスに見えたのが日本の飛行機だったのです。がっかりしたというか、これでアメリカの飛行機に勝てるとは思えませんでした。

○ 女子農学校、お弁当のこと

昭和20年4月、私は鳳来寺女子農学校の1年生になりました。前年の19年4月に鳳来寺高等家政女学校が改称されたのです。農山村における女子教育の充実のためだったようです。

担任の先生は神谷先生で、東新町の最勝院というお寺の住職をされていました。その神谷先生には不思議なことがありました。昼食の時間になると自分のアルミの弁当箱を開けます。中は毎日いつも決まってお芋でした。そして「みんなも弁当のフタを開けなさい。」と言われるのです。弁当のふたを開けると、先生は腕を

組みながら弁当を確認して回るのはです。のぞき込んでは「ふむ、ふむ」とうなずきながら回っていきます。この辺りは田舎ですからお弁当を持ってこられない子はいませんでした。それでもご飯だけの弁当を持ってくる子は少なかったです。麦ご飯に梅干しとお芋の組み合わせの子が多かったです。私の家は農家でしたので、麦ご飯に大好きな削り粉と梅干しの組み合わせの弁当でした。お米は供出しますので、白米だけのぜいたくはできません。

「ふむ、ふむ」先生が弁当の中味のことをとやかく言われることはありません。ぜいたくだとは決して言われませんでした。先生がみんなの弁当を確認して回られたのはなぜだったのでしょうか。みんなの暮らしぶりを知るためなのか、ぜいたくを慎ませるためだったのかは分かりません。今でも不思議に思われます。

○ 勤労作業、終戦の日のこと

昭和20年当時の農学校は、豊橋陸軍病院が疎開していて、本館と第2棟の東側半分、それに講堂を使用していました。教室があった2階からは1階にある病院で手術するのが見えるので、今日は何の手術かなあと話しながら見ていました。

1年生の時は作業ばかりでした。毎日唐鍬を持って食糧増産のために大栗平の、今の鳳来寺小学校の所の木を切って開墾し、サツマイモを栽培しました。その次は今のやまびこ学童農園の場所を開墾しました。そんな勤労作業ばかりでした。これは、昭和19年に出された学徒動員令により、児童、生徒も勤労働員されたもので、どの学校でも同じような状況だったと思います。

玉音放送があった時は、学校から帰宅しようとして田口線の鳳来寺駅にいた時でした。ラジオもまだあまり個人の家にはない頃のことです。同級生の鈴木さん（沖縄出身で、疎開していた）が、駅にいたみんなに向かって大声で、「日本が負けたよ。もう戦争せんでよくなったよ。」と大声で叫んできました。彼女は駅近くにある学校の寮（30人ぐらいいた）に入っていたので、ラジオで玉音放送を聞くことができたのだと思います。いっしょにいた同級生も私も、とっさのことに意味が分からず何の反応もできなかったことを覚えています。それでも少しして、「ああこれで戦争が終わった。」「やっと外へ出かけられるね。」と話しながら、ほっとしたことを覚えています。

私の家は山間部にあったので、戦時中でも空襲でねらわれることもなく、比較的のんびりして安気に過ごしていました。でも、昭和19年には私の2学年上の鳳来国民学校高等科2年生は豊川海軍工廠に学徒動員されていますし、4学年上の鳳来寺高等家政女学校の4年生も海軍工廠へ学徒動員されています。私たちの学年は、年齢が少し下だったことで軍需工場に行くこともなく空襲の恐ろしさも知らずにすみしました。そのことはとても幸運なことだったと感じています。

若いみなさんには、戦争の犠牲になられた多くの方々に思いを寄せ、感謝することで平和の糸をしっかりと紡いでいってほしいと思っています。